
空飛ぶ一万円札と僕

丹羽凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空飛ぶ一万円札と僕

【Nコード】

N9701S

【作者名】

丹羽凜

【あらすじ】

父親のいない少年の話です、たぶん

(前書き)

一作目です。つたない文章ですがよろしく願います。

僕には父親がいない。気づいた時には、母親一人で僕を育ててくれていた。いつも母は、僕の名を呼んではこう言った。

「お父さんはね、ヒロユキ。いつもお前を見守ってくれているんだよ。」

子供のころは、ホントにどこかで見ているのかと思って、家中を探し回ったりしたが見つかるはずもなかった。母が「空から見守ってくれているんだよ」といえば、一日中空を眺めたりしていた。周りからはそんな姿が痛々しく見えたのか、可哀そう、だとか、がんばってねだとかいろいろな言葉が投げかけられたが、僕がその意味を解するにはまだ幼すぎだった。

次第に年を取り、母の言葉が父の死を意味するのだとわかった。ただそれによって、悲しいとか悔しいとかそういった気持ちは出てこなかった。ただ、周りの友達が父親の話をしていたりすると、なんかつまらない気持ちになったのも確かだ。

そんなこんなで僕はさらに年を取り僕は高校生となった。母子家庭はたいてい家計が苦しい。それはもちろん僕の家も同様で、奨学金をもらうために相当な努力をしていた。それと同時にバイトもしだした。家の近くにあるコンビニで週3回程度、月に3万ほどの収入だ。勉強との両立をするにはこれが限度だった。問題だったのは、給料が振り込みでなく手渡しだったからだろう。

5、6回目の給料日。4月から始めたから5回目だと思うが、そんなことはどうでもいい。夜9時までのバイトが終わり、店長から給料をもらう。僕の心は浮ついていた。なぜかって？念願の10万がたまるからだ。予定としては諸経費込みで10万きっかりの原付を買うはずだった。浮足立った僕は早く家に帰るべく、普段は通らない路地裏に入る。片道10分、しかし、この道を使えば7分に短縮できる。微妙な近道だが、3分は意外と大きいのだ、たぶん。

ただ、今日ここを通ったのは間違いだった。しかし、その時の僕がそんなことに気付けるはずもなく、僕はその路地に吸い込まれていった。そこにいたのは、見事なまでに不良の一団だった。ただ不良と一方的に決めつけるのはどうかという人もいるだろうが、金色に逆立つその髪は不良の象徴と言って問題ないだろう。そして付け加えるに一団といっても4人ぐらいである。僕は踵を返すか、そのまま進むかの二択を決めなければならなかった。だが一つ注意しておくとは僕は、浮足立っていたのである。もうそれは、羽を与えられたイカロスのように。迷うことなく、僕はその不良がたむろっている中央を横切って行った。

こんなとき大人たちは、「そんな場所は通ってはいけません」だとか何とか言って、この場所から離れるのだろう。しかし、ふつうは「公道なら通って然るべき」とその不良どもをギタンギタンになぎ倒しながら通ればいいと僕は思うのだ。つまり、結果として僕はそれほど力があると思えばるほど浮足立っていたのだ。

不良たちの目の前に踏み出す第一歩。僕はこれから買うであろう原付に夢をはせながら踏み出した。同時に声が聞こえる。

「おい」

その声は探るまでもなく目の前の集団の中から聞こえた。目がぎらついている。それはまさに罠にかかった獲物を見るように。僕は条件反射的に声を出す。

「はひい？」

その声はどこから出たのだろう。自分自身が驚くほど高い声で言っていた。言っておくが、恐怖で身がすくんだとかじゃない。くすくすと笑い声が聞こえる。自分も笑いそうになるが、それはあまりにも悲しそうなので右腿をつねって何とかこらえた。

「こいつビビってんじゃねえの」

「いいじゃん、いいじゃん」

などと言っているが、僕には身の覚えがない。そして、リーダー格であろうあの金色の髪を逆立てている、いわば、カメハメ波でも撃

てそんなやつが高圧的に言い放つ。

「金出せ」

その一昔にドラマで流行っていきそうな言葉が僕に言った言葉だと気付くのに1分はかかった、僕の体内時計では。

「いやです。あなた方に渡す金はびた一文ありません」

僕は素晴らしいながら、次に飛んでくる言葉を、いや、パンチをどうよけるかに入念がなかった。相手の右ストレートを見事なダッキングでかいくぐり、そのまま右アッパーで相手を顎から吹き飛ばす。周りのやつがその華麗なる動きを見て呆然としている間に、脱兎のごとく逃げ去る。僕は数秒のうちにそれ三度繰り返しイメージしながら、相手を待った。

「なんだと」

見事な返し文句とともに、パンチが飛んでくる。僕はイメージ通りにダッキングをし、相手の懷に飛び込んだ。はずだった……。気付けば僕は地面に横たわっていた。一瞬意識が飛んでいた。何が起ったのかわからず、相手を見る。僕は愕然とする。サウスポーだ。俺が入念にイメージした右ストレートでなく、左ストレートが僕の顔面に入ったようだ。立とうにもふらふらして上手く立てない。

「さっさと金出せや」

僕は半ばあきらめムードで、ジーンズのポケットから封筒を取り出す。ただ、単に渡すのも癪だったので中にある3万と小銭をつかんで思いっきり投げつけた。これが今できる唯一の抵抗だった。

一万円札はひらひらと舞い、小銭は放物線を描いて地面に転がる。自分のお金じゃなかったらなんて魅力的なんだろうか。そう思いながら、僕は地面に倒れこむ。

「おい、お前らなにをやってる」

突然そんな声が聞こえる。おっさんの声だ。

「やべ、逃げろ」

不良たちはその声に敏感に反応し逃げていく。しかし逃げながらもお金を拾っていく姿は称賛に値する。2万は持ってかれてしまった

だろう。無念の思いで涙も出ず、とりあえず僕はあたりを見回す。こんな夜に人助けをするおっさんはどのどいつだろうと見渡すがだれもない。ただ一つ、目につくのは一万円札が宙に浮いているということだけだ。

そんな、ありえない風景が今の僕には当たり前のように映る。

「ヒロユキ、お前はばかだなあ」

懐かしい声が聞こえる。どこからって？もちろん諭吉さんからだ。

僕は今見ている光景を呆然と見ながらも、その声が父親であると感じた。

「母さんが言ってたろ。いつも見守ってるって」

そう言いながら、一万円札は高度を下げる。僕は何も答えずにいる。「そろそろ時間だ。また、ピンチになったら助けに来るよ」

言い終わると同時に地面に落ちる。僕はその一万円を拾い上げる。表を見ても裏を見ても何ら変わりはない。同時に笑いがこみあげてくる。残ったのはその一万と数百円。そして、父親らしき声はもう聞こえない。これが現実だろうが、夢だろうがどっちでもいい。ただ父親に会えたかもしれないのは2万以上の価値がある。これを誰かに言えば頭がおかしいといわれるに違いない。たがきつと、僕は初めて父親を誇れるだろう。きつと誰よりも。

そして僕は家路についた。来月買うであろう原付を夢に見ながら。

(後書き)

感想もらえるとうれしいかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9701s/>

空飛ぶ一万円札と僕

2011年10月8日23時14分発行